

行事と保育② (運動会を例に)

理事長 片山喜章

運動会は、欧米にはない日本固有の伝統文化です。ですから、観客である保護者の方々もお祭り気分、準備や片づけを含めて、ともに参加して楽しむイベントです。子どもたちにとっては、当日の出来、不出来、以上に、多くのお客さんに見ていただく事がたいそう有意義な経験になります。当日、子どもたちは、力発揮しようとはしますが、緊張して固まったり、照れくさくてチョコたりして、練習時の姿を出せない子どももいます。しかし、それもまた“幼児時代の経験(姿)として有意義である”と幅広く受けとめる大人の姿勢や態度が大事です。固まる姿は“感性の豊かさの1つの現れ”であると受けとめていただきたいです。

近年、子ども(大人も)の感受性は、様々な刺激によって豊かに敏感になった分、傷つきやすくなり、大人が落胆の言葉を口にしたり、物足りなさを表情に現わすと、子どもによっては、鋭く感じ取って、自己肯定観や生きる力を奪われる場合もあります。

一方で、運動会は「保育の一環」であり「日頃の保育の延長」とか「練習をしすぎない事が望ましい」などと“綺麗事の保育論”が今も尚、多くの現場で語られています。

種の会としては、そこは明確になっています(私自身が運動会向けの本を何冊か出版し、全国で講習会活動も行っています)。その年齢の子どもたちが、本来、備えている力や意欲をしっかり引き出す創意ある練習がなされているか＝練習の質を問います。例えば、5歳児のトラックリレーも一般的に1チーム10名以上いると、練習中では、待ち時間が多く退屈で“お砂いじり”をして先生にお叱りを受けます(幼児にふさわしい練習法ではありません)。

種の会流の練習は、初期段階は、30人のクラスなら3人1組10チームで、楕円のトラック上にそれぞれマイ陣地をほぼ等間隔につくって、スタートし、エンドレスでリレーを楽しみます。3回に1回、自分の番がまわってくるので飽きる間もなく、わずか5分間で1人が5回以上、トラックを周回し、バトン(玉入れの玉等)の受け渡し練習を楽しめます。

また1度に10名が走るの、抜きつ抜かれつ、の競走があって(タッチする場所は円周上に分散)、子どもたちは終始、キラキラしながら、走ってバトンを受け渡し、意欲はグンと高まります。練習時間は短くてもリレーの練習量は多くなり、練習が多くなれば、戸惑ってトラックをショートカットするリスクも少なくなり、素早くバトンを受け渡すコツも会得しやすくなります。その上で、本番用の練習に入るとというのが、オリジナルな練習方法です。

3～4歳児の2人～5人組くらいのふれ合い演技もメンバーは固定せず、毎回、自分たちで仲間探しをします。本番も子ども任せです。トラブルも生まれますが、任せるから子どもは自分たちで解決しようとはします。このような練習のくりかえしが、“関わる力を育む”という“保育の重要なねらい”の達成に直結することをめざしている趣旨を、ご理解ください。